東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

移民背景をもつ家族の資本と子どものバイリテラシー：ドイツ在住の外国人家庭および国際結婚家庭の比較分析にもとづいて：調査報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ビアルケ・當山,千咲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/132311

調査報告

移民背景をもつ家族の資本と子どものバイリテラシー
――ドイツ在住の外国人家庭および国際結婚家庭の比較分析にもとづいて――
Capital of Families with an Immigrant Background and Child Biliteracy
A Comparative Analysis on Foreign- and Intermarriage Families in Germany

ビアルケ（當山）千咲（大妻女子大学・非常勤講師）
Chisaki TOYAMA-Bialke（Otsuma Women's University）

<要約>
本稿は，本人または親（少なくとも片親）が滞在国以外の国で生まれた移民背景をもつ生徒のバイリテラシーに焦点を当て，家庭のどのような社会関係資本，文化資本とその投資活動が，彼らの滞在国の言語である現地語と母語／継承語である少数言語のバイリテラシー形成に有益であるかを検討する。この課題の検討にあたり，ドイツの４校の母語／継承語学校（日本語，ギリシア語，ポーランド語，ロシア語）の生徒を対象とする質問紙調査のデータを，両親とも外国生まれの外国人家庭と，片親がドイツ生まれの国際結婚家庭のそれぞれについて分析した。

その結果，次の２点の知見が得られた。第１に，親子間で現地語を使用しなくとも，親の学歴や現地語力という高い文化資本があり，その投資活動である読書が行われる場合に，高い現地語力が育つ。これに対し，少数言語関連の資本を失わないように家庭でそれを使用するとともに，読書などの投資活動をすることが高い少数言語力と関連していた。第２に，２つの家族類型では現地語と少数言語に関連する資本の量が異なっており，各家族類型において乏しい傾向がある資本を補完するような投資活動を行う場合にバイリテラシーが形成されることがわかった。

＊キーワード：バイリテラシー，社会関係資本，文化資本，外国人家庭，国際結婚家庭

1. はじめに

近年の国際学力比較調査では，本人または親が滞在国以外の国生まれの移民背景を持つ生徒（以下「移民背景を持つ生徒」とする）の学力と滞在国言語の力（以下「現地語力」とする）が低いことが問題化している（OECD, 2006; Mullis et al., 2007）。特にEU諸国ではこの傾向が著しく，家庭の低い社会経済的地位や家庭での少数言語の使用が低学力と関連していることから，現地語指導を強化する国も少なくない。だが上記の要因だけでは低学力を説明しきれず，未解明の部分が大きいことは見逃されがちである。例えば，移民背景をもつ生徒と両親とも滞在国生まれのネイティブの生徒の学力格差が非常に大きいドイツの場合も（OECD, 2006），親の学歴が高い生徒ほど家でドイツ語を多く使用し，少数言語を使用する生徒よりも学力が高い傾向が示されている。ところがこのドイツ語使用生徒でもネイティブ生徒に学力が及ばないこと，また片親がドイツ人である国際結婚家庭の生徒でも同様の傾向があることが分かっているが（Ramm et al., 2005），その原因は解明されていない。

移民背景をもつ生徒の学力は，二言語環境に育つ中で形成されてゆくため，その解明には現

地語力のみならず，彼らの母語／継承語である少数言語力[1]にも注目する必要があること，また家庭の社会経済的地位の内実として，具体的にどのような条件や実践が二言語力形成に関与しているのかという検討の必要性が指摘されている（Baker, 2006）。

このような関心から本稿は，移民背景をもつ生徒の滞在国における学業的成功に必要な現地語力と少数言語力，特に二言語での読み書き能力（以下では，「バイリテラシー」「バイリテラル」と呼ぶ）に注目し，その形成を可能にする家庭の社会的条件や実践の解明を目指す。

2. 先行研究

二言語環境に育つ子どもの言語発達の研究は，言語学，心理学，社会学など多様な分野で取り組まれてきた。言語学や心理学では二言語力の発達を主に個人レベルで解明してきたのに対し，社会学では滞在国での適応や学業的成功の社会的条件や文脈に注目してきたが，近年は学力の基盤である現地語力と少数言語力にも射程を広げつつある。本稿の関心はこうした社会学的研究に接続するものであるが，以下では他分野の研究知見も参照しつつ，特に本稿の関心の焦点である家庭の社会的条件や実践に関わる知見を中心に整理し，本稿の課題を具体化する。

子どもの二言語力を規定する要因は，当該社会の言語政策や教育制度などマクロなものから，家庭や個人レベルのミクロな要因まで多様であるが（Baker, 2006），その中で特に重視され，また争点の一つとなっているものに家庭の言語使用がある。これについては，少数言語力に焦点を当てる研究と現地語力に当てる研究がある。まず前者は，少数言語の保持にはその家庭での使用が不可欠で，多いほど保持率が高いことを示している（DeHouwer, 2007 等）。その際，年齢という要因が介在し，特に少数言語力の基盤が形成されていない 8—9 歳以下の子どもの場合，現地語使用にシフトして親子間の少数言語使用が困難になり，その喪失の危険性も大きい（中島，2001）。これに対し現地語力と家庭の言語使用の関連に関する研究では一致した見解が得られていない。すなわち家庭で現地語を使用するほど子の現地語力が高いとする研究がある一方（OECD，2006 等），こうした関連はないとして，家庭の言語使用以外の要因の影響を指摘する知見がある（Portes & Hao, 1998 等）。しかし移民背景をもつ生徒の二言語力は，実際には二言語力とも高いタイプ，二言語力とも低いタイプ，どちらかの言語の力がもう一言語の力より高いタイプと多様であることから（Esser, 2006），二言語力を同時に検討し，その形成の条件を解明する必要がある。

この点で参考になるのが，二言語力に注目しながら移民背景をもつ生徒の学業達成の条件を検討している社会学的研究で，「社会関係資本」に着目するものと，「文化資本」に焦点を当てるものがある。

まず前者は「社会関係資本」を，「関係のシステムであり，システム内の成員に対し特定の行為や規範の共有を促進すると同時に，情報への特権的アクセスを与えるもの」と捉える（Coleman，1988）。その代表的な論者であるポルテスとランバウト（Portes & Rumbaut, 2001）は，学業的成功・失敗の 3 つのパターンとして，①少数言語力が衰え，現地語力も低い低学力の生徒，②現地語モノリンガル化した高学力の生徒，③高バイリテラルで高学力の生徒，を挙げている。特に③は，親子関係，進学アスピレーション，自尊心に関しても最善のアウトプットを示しており，その形成には社会関係資本が関与しているとされる。すなわち家庭での少数言語使用，エスニックコミュニティへのコミット，バイリンガルプログラムのある教育機関の選択という条件があれば，子の少数言語力が保持されやすいこと，またそれにより良

好な親子関係と規範の共有，支援や情報を提供するエスニックコミュニティという社会関係資本へのアクセスが可能になり，学業的成功につながることを示した。この視点をさらに拡張したアバダら（Abada et al., 2009）は，親子間の少数言語使用やエスニックコミュニティへのコミットだけでなく，家庭外で現地語を使用する友人関係や組織という社会関係資本へのコミットも重要であることを明らかにしている。

以上の研究は主に学業達成に焦点を当てているが，本稿の関心であるバイリテラシー形成にも拡張可能と考えられる。すなわち社会関係資本が「関係システム内の成員に対し特定の行為や規範の共有を促進する」ならば，特定の言語を用いる社会関係資本はその言語や文化的規範の習得を促進すると考えられるため，二言語の社会関係資本へのコミットは高二言語力につながると仮定できる。

2つめに，文化資本に焦点を当てる研究では，これを「学歴など制度化された資本の他，言語の使い方等の身体化された資本であり，時間と労力を投じる活動により親から子へ継承され，学業的・社会的成功につながる」（Bourdieu, 1983）と捉え，次のような知見を提示している。まずナウクら（Nauck et al., 1998）は，移民背景を持つ親の学歴という文化資本が子の学業達成として継承されるには，親の高い現地語力という媒介要因が必要なことを明らかにしている。また宮島（2003）は，移民背景を持つ親の学歴は，子に少数言語力があれば，学習に必要な知識や抽象概念，学びのハビトゥスの伝達が可能になり，現地語での学業的成功へと変換されると述べている。つまり親が高学歴・高現地語力という文化資本を持ち，家庭の少数言語使用により少数言語力が保持される場合に文化資本が十全に継承されると言える。

以上の研究の焦点も学業達成に当てられているが，バイリテラシーの形成に読み換えが可能と考えられる。すなわち，文化資本の継承に必要な「時間と労力の投資」については，言語能力を文化資本の一要素である「言語資本」（宮島，2003）と捉えるならば，文化資本の継承において重視されてきた読書や家庭学習（宮島と藤田，1991；OECD，2002）は特に言語資本の有益な投資活動であり得る。実際に，家庭で少数言語を使用している移民背景を持つ生徒でも現地語での読書・家庭学習が多い場合，その現地語力と学力はネイティブ生徒と同レベルであること（Cresswell, 2004），また少数言語力についても，家庭での少数言語使用に加え，読書や家庭学習の重要性が示唆されている（佐藤と片岡，2008等）。

以上をまとめると，二言語の社会関係資本へのコミット，親の高い文化資本（学歴，二言語力），そして家庭での少数言語使用と二言語での読書や家庭学習という投資活動により，高バイリテラルが育つという仮説が成り立ち，本稿ではこれを検証する。

また本稿では，両親とも滞在国以外で生まれ，同一の少数言語の母語話者である家庭（以下「外国人家庭」とする）と，片親が滞在国生まれである国際結婚家庭（以下「国際家庭」とする）という2つの家族類型の違いにも注目する。これまでの研究には両者を区別せず取り扱うものが多いが，子どもが二言語環境で育つという点で両者は共通であるものの，「家族の資本」という視点から見ると相違点もあるからである。すなわち国際家庭には滞在国生まれの片親がおり，現地語関連の社会関係資本・文化資本が外国人家庭より豊かである一方，少数言語関連の資本は相対的に乏しい傾向が想定できる。事実，国際家庭では外国人家庭より現地語使用が多く，子の現地語力が高い傾向があり（Ramm et al., 2005），他方で少数言語が継承されにくいことが実証されている（Clyne & Kipp, 1997）。ただしそれぞれの家族類型内で親の二言語力や

言語使用の実践には多様性もあるため（ビアルケ，2011），各家庭が二言語の資本をどのように投資するかも多様であると考えられる。したがって各家族類型内の多様性と両者間の共通点・相違点に目配りしながらバイリテラシー形成の条件を検討する。

この課題の解明の意義として，次の2点が挙げられる。第1に，「移民背景をもつ家庭」というカテゴリーには，底辺労働に従事する外国人労働者家庭，高度専門人材や起業家，国際結婚家族など多様な特徴の家族が含まれるが，こうした家族はグローバル化により増加している（関口，2007）。その子どもは二言語環境に育つ中で，学力や言語力の形成に関してネイティブ生徒にはない特徴やリスクを持つと考えられ，その解明の重要性が高まっている。第2に，日本における子どもの二言語力の研究は海外帰国子女生徒を対象に開始されたが，近年は海外に長期滞在する邦人生徒や国際児が増加している（佐藤と片岡，2008）。こうした子どもは滞在国教育制度では「移民背景をもつ生徒」として処遇されているのであり，本稿の課題の解明は，彼らの学力形成に必要な現地語力と，少数言語である日本語力の問題にも一定の示唆を与えうる。

3. 研究方法

上記の課題を検討するにあたり，ドイツのA州の州都B市で2007年11月から2008年1月にかけて筆者が実施した，母語／継承語学校の生徒とその親を対象とする質問紙調査のデータを分析する。母語／継承語学校とはエスニックコミュニティが運営する機関で，普段は現地校に通う生徒に母語／継承語の授業を週に数時間提供する。この調査は，母語／継承語学校に関する調査がこれまでほとんどないドイツで，その生徒と家庭の特徴を大まかに探ることを目的とする探索的調査である。質問紙には生徒の属性や二言語力等に関する質問の他，親の学歴や二言語力，言語使用など家庭背景に関する質問が含まれている。質問紙は領事館および各民族団体経由で9校の母語／継承語学校の運営者の協力を得て生徒に配布され，自宅において親子で記入後，各校経由で回収された。

このデータを用いる理由は次の通りである。第1にEU諸国では移民背景をもつ生徒の低学力傾向が北米や豪州より顕著であり，その原因は未解明な部分が大きいが，研究蓄積が比較的少ない。この点で，移民背景をもつ生徒とネイティブ生徒の学力格差が最大の国の一つであるドイツの問題の解明は意義がある（OECD，2006）。第2にA州の学校制度という同一の条件下にいる生徒を対象にできる点である。A州の場合4年間の初等教育を行う基礎学校の後，その成績に応じて上からギムナジウム，実科学校，基幹学校の3種の中等学校に進路分化するというドイツの典型的な制度をとっている。高等教育機関に直接進学可能な卒業資格を与える中等学校種はギムナジウムのみで，高学歴志向の強まりにより基礎学校4年時には選抜の圧力が強い。本データでは，この同じ選抜制度という共通の土俵にある生徒集団を取り上げることができる。第3に，調査対象の母語／継承語学校に在籍する生徒のほとんどは，OECDなどの国際機関や諸統計で「移民背景を持つ生徒」のカテゴリーに含まれる者である。その中で母語／継承語学校の運営母体であるエスニックコミュニティにコミットし，バイリテラシー形成を目指しているという条件がそろっており，その条件も特定しやすいと考えられる。このデータのデメリットは，サンプルが比較的小さく，異なる言語集団を含むという点であるが，こうした集団間の相違点にも着目したこれまでの研究（Portes&Rumbaut，2001等）に習い，この点に注意しつつ分析を行う。

本稿では前述のデータのうち，生徒数200

名以上の大規模校で質問紙回収率が50%以上に達した4校（ギリシア語，日本語，ポーランド語，ロシア語）の生徒のデータを用いる。その回収率から各校の生徒集団の特徴を正確に反映するという意味では一定の限界があることも指摘しておく。ギリシア語，日本語，ポーランド語については対象校がB市で唯一の当該言語の母語／継承語学校であるが[2]，ロシア語については市内に数校あるとされる大規模校の一つで，いずれも幼稚園ないし小1から高校卒業学年クラスまで設置されている。さらに本稿の課題に照らして分析対象を，両親とも各校が指導する言語（以下「M語」とする）を公用語とする国（以下「M国」とする）生まれの「外国人家庭」と，片親がM国生まれでもう一人がドイツ生まれの「国際家庭」の子どもとし，さらにドイツ語を主言語とする現地校に通う小3以上の生徒に限定する。理由の第1は，ドイツの学校では小3から成績がつけられ，それが後述するように大まかだが学業達成に必要なドイツ語力の客観的な指標として利用できるためである。第2にドイツ語以外の授業言語を使用するインターナショナルスクール等の生徒（全回答者の4%）や，片親がM国生まれで，もう一人の親がドイツとM国以外の第3国生まれの家庭（全回答者の7%）を除くのは，それが少数であることと，両親の言語，生徒の学校言語，現地語の3ないし4言語を使用するケースがあり，問題が複雑化しすぎるためである。したがって分析対象は，生徒262名（ギリシア語83名，日本語61名，ポーランド語69名，ロシア語49名）である。

分析は次の手順で行った。

①分析対象の生徒がドイツの移民背景をもつ生徒全体と比べ，入国年齢や家庭背景に関してどのような特徴を持つ集団なのかを，ドイツおよびA州の移民背景を持つ生徒全体に関する諸統計と比較しながら確認する。

②どのくらいの生徒がどの程度のバイリテラシーを持つのかを検討する。

③ドイツ語力およびM語力が高い集団と低い集団の間には，社会関係資本および文化資本とその投資活動にどのような違いがあるかを，外国人家庭と国際家庭のそれぞれにおいて検証する。

④高バイリテラルになるか否かに影響を与える要因を特定する。

4. 分析結果

4.1 母語／継承語学校の生徒の特徴

以下では対象生徒の家庭の家族類型，入国年齢，親の学歴を確認する。

第1に家族類型については，生徒の54%は両親ともM国生まれの外国人家庭の子ども（以下「外国人児」と呼ぶ）であるのに対し，34%は父ドイツ生まれ母M国生まれの家庭，12%が父M国生まれ母ドイツ生まれの家庭，合計46%が国際家庭の子ども（以下「国際児」と呼ぶ）である（表1）。大規模調査で対象となったA州の移民背景をもつ生徒全体でも，外国人児と国際児はほぼ半々であるため，本調査の対象者もそれに近い構成といえる（Bos et

表1　生徒の家庭の家族類型：母語／継承語学校別（%）

家族類型	両親の出生国	ギリシア N=83	日本 N=61	ポーランド N=69	ロシア N=49	全体 N=262
外国人家庭	両親ともM国生まれ	54	15	77	69	54
国際家庭	父ドイツ母M国生まれ	15	80	23	25	34
	父M国母ドイツ生まれ	31	5	0	6	12
	合計%	100	100	100	100	100

表2　生徒のドイツ入国年齢：家族類型別および母語／継承語学校別（%）

入国年齢	家族類型別		母語／継承語学校別				全体
	外国人児 N=141	国際児 N=118	ギリシア N=82	日本 N=60	ポーランド N=68	ロシア N=49	N=262
ドイツ生まれ	60	87	99	77	54	43	71
6歳以下	18	2	0	18	17	40	17
7歳以上	22	11	1	5	29	17	12
合計%	100	100	100	100	100	100	100

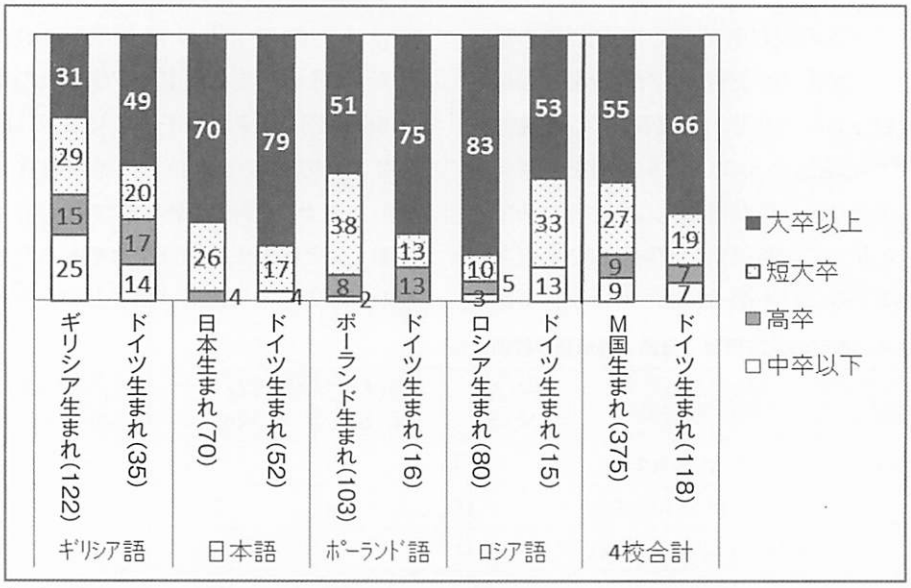
al., 2008)。ただし日本語の場合，生徒の大半が国際児だが，ポーランド語とロシア語学校では外国人児が7割またはそれ以上，ギリシア語は両家族類型が半々であり，学校間の違いも大きい。

第2に，対象となった生徒の平均年齢は11.9歳で，外国人児の60%，国際児の87%がドイツ生まれである（表2)。また外国人児の18%，国際児の2%は6歳以下でドイツに入国しており，大半の生徒が就学年齢以前からドイツに滞在している。学校別に見ると，7歳以上で入国した生徒の割合はポーランド語およびロシア語学校でやや高い。

移民背景を持つ25歳以下の若年人口のA州全体の統計を参照すると，67%がドイツ生まれ，6歳以下で入国した者は8%なので（BMBF, 2006)，本稿の対象生徒のドイツ生まれの割合はA州全体のそれに近く，入国年齢は若干低い傾向があるといえよう。

第3に，母語／継承語学校生徒の出身階層の一指標である親の学歴については，図1に示した。いずれの学校も短大卒以上が6割以上もおり高学歴の親が多いことがわかる。ドイツ居住の移民背景をもつ成人全体の統計では，ギリシア人では，中卒以下が63%，高卒18%，短大以上が19%，ポーランド人では，中卒以下が38%，高卒23%，短大以上が39%である（von Gostomski, 2007)。また旧ソ連出身

図1　親の出生国と学歴：母語／継承語学校別（%）



（　）はN

者では中卒以下が20%，高卒40%，短大以上が40%，ドイツ人ネイティブの統計では中卒以下が17%，高卒44%，短大以上が39%（Müller & Stanat, 2006）であることから，本稿の対象生徒の親には各言語集団の中でも高学歴層が多く含まれていることになる。ドイツ在住の日本人の学歴の統計はないが，中卒以下と高卒は非常に少なく，やはり高学歴層が多いといってよいだろう。

以上から，母語／継承語学校の生徒はA州の入国年齢が移民背景をもつ生徒全体より若干低い点以外は極端に逸脱した集団ではない。しかし高学歴の親が多い点では，ネイティブ生徒に比べ親が低学歴傾向であるドイツの移民背景の生徒全体とは異なるといえる（OECD, 2006）。

4.2 生徒のバイリテラシー

次に，どのくらいの生徒がどの程度のバイリテラシーを持つのかを検討する。本稿では二言語力検査を行っていないため，まずドイツ語力については次のような手続きで生徒をドイツ語力の高低二集団に分けた。ドイツの基礎学校では小3から数値化した成績を出すが，A州の場合，小4時のドイツ語，算数，生活科の成績平均が2.33以下（6段階評価の1が最高点，6が最低点）でなければギムナジウムに進学できない。また中等教育段階では学校種間のドイツ語力の格差が明確にあり（Deutsches PISA-Konsortium, 2001），ギムナジウムに進学するか否かがその後の教育達成を左右するとされている。そこでドイツ語の成績が2以下と回答した基礎学校の生徒とギムナジウム生徒を「高ドイツ語力集団」とし，基礎学校児童でドイツ語成績が3以上の者と，基幹学校および実科学校生徒を「低ドイツ語力集団」とした。

M語力については次の方法で高低二つの集団に分けた。調査では生徒にM語の読解力を5段階で自己評価により回答してもらっている。自己評価は現実の言語力を正確に把握する点で限界があるが，M語読解力の自己評価は補習校の授業の難しさへの5段階評価の回答とも高い相関を示しており，また近年のドイツの大規模調査では比較的信頼性が高いことが確認されているため（Haug, 2005），ある程度有効な指標と判断した。そこでM語読解力を「とても高い」「高い」と回答した生徒を「高M語力」，それ以下を「低M語力」とした。このように二言語力をそれぞれ二集団に分けた後，その組み合わせを家族類型別，学校別に示したのが図2である。

家族類型別でみると，外国人児では高二言語力が55%と半数以上，国際児でも41%である。国際児にはドイツ語が優位でM語力が低い生徒，外国人児にはドイツ語力は低いがM語力が高い生徒が多い傾向がみられる。また学校別に見ると，ギリシア，ポーランド，ロシアの3校では半数以上が高二言語力であるが，日本語ではドイツ語優位の生徒が多い。これは国際児の割合が高いためでもあろうが，実は国際児集団内でも格差があり，その規定要因については次節で見てゆくことにする。

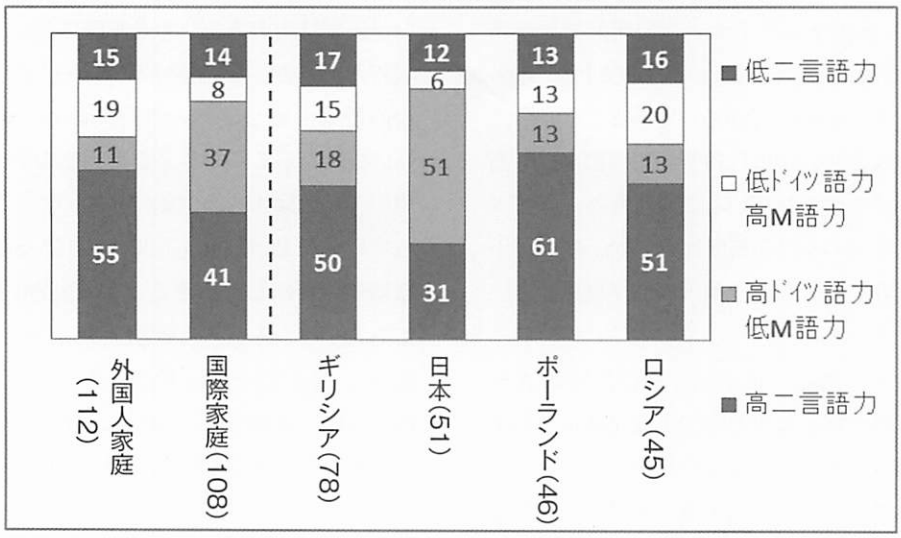
4.3 バイリテラシーと関連する要因

以下ではドイツ語力とM語力の高低2集団の間に，属性，家庭の社会関係資本および文化資本と投資活動に関してどのような差があるかを検証してゆく。先行研究において二言語力を規定するとされた要因を参考にし，分析には次の変数を用いた。①～③は生徒の属性に関わる変数，④，⑤はドイツ語およびM語に関連する社会関係資本，⑥～⑧はドイツ語およびM語に関連する文化資本，⑨～⑪はその投資活動に関連する変数である。

①【性別】生徒の性別。

②【入国年齢】生徒のドイツ入国年齢が9歳未

図2　生徒（小3以上）のバイリテラシー：家族類型別と母語／継承語学校別（%）



（　）はN

満か以上か[3]。

③【言語集団】在籍する母語／継承語学校であり，言語集団を表す。

④【ドイツ人友人数】ドイツ人の友人数が「多い」「数人以下」の2択の回答。ドイツ語関連の社会関係資本の指標とする。

⑤【M国訪問期間】過去5年間にM国を訪問した期間の合計（単位：週）。調査対象の生徒は母語／継承語学校に在籍し，その運営主体である現地のエスニックコミュニティにコミットしていることになるため，M国の人的ネットワークへのコミットをM語の社会関係資本の指標とした。

⑥【親の学歴】親の学歴を教育年数に換算し，中卒以下には4，中卒には9，高卒には12，ギムナジウム卒には13，短大卒には14，大卒には17の値を与えた。

⑦【親のドイツ語力】M国生まれの親のドイツ語力で，ドイツ語関連の文化資本の一つと捉える。本人に自分のドイツ語力を「話す」「読む」「書く」の3領域でそれぞれ5段階評価してもらった総和の値を用い，最低値は3，最高値は15である。

⑧【親のM語力】ドイツ生まれの親のM語力でM語関連の文化資本の一つと捉える。⑦と同様に，M語力の3領域における5段階の自己評価の総和の値を用い，最低値は3，最高値は15である。

⑨【親子間のドイツ語／M語使用度】ドイツ語使用度の場合は，「父／母から子への言語使用」および「子から父／母への言語使用」で，「ドイツ語のみ」～「M語のみ」または「その他の言語」の回答に4～0の値を与え，「父／母→子」「子→父／母」の言語使用を合計した変数。最低値0～最高値16。M語使用度の場合は，「M語のみ」～「ドイツ語のみ」／「その他の言語」の回答に4～0の値を与え，同様に設定し，最低値0～最高値16。

⑩【ドイツ語／M語での読書時間】週当たりのドイツ語またはM語での読書時間。

⑪【ドイツ語／M語での家庭学習時間】ドイツ語の場合は，週当たりの現地校のための家庭学習時間。M語の場合は，週当たりの母語／継承語学校のための家庭学習時間。

4.3.1 ドイツ語力別集団間の比較

上記の変数を家族類型ごとにドイツ語力の高低2集団間でカイ二乗検定とt検定を用いて比

較し，表3の結果を得た。以下，まず両家族類型に共通に見られた結果，次に各家族類型で見られた結果の順に論じる。

性別と入国年齢については両家族類型で有意な差は見られず，有意な差が共通に見出されたのは，親の学歴（国際家庭の場合は父親の学歴），親のドイツ語力（国際家庭の場合は，M国生まれの母親のドイツ語力），ドイツ語読書時間の3変数である。しかし親子間のドイツ語使用度はいずれの家族類型においても差がみられない。つまり親子間のドイツ語使用が多いとドイツ語力が高いわけではなく，むしろ親の学歴やドイツ語力という文化資本の高さや，その投資活動である読書がドイツ語力の差と関連すると考えられる。

これに対し家族類型別では次のような差が見出された。

第1に，外国人家庭のみに見られたのは，高ドイツ語力の生徒はドイツ人友人数が有意に多いということである。同様の差は国際家庭の場合は見られない。ここで外国人児の親子間のドイツ語使用度の平均値に注目すると，高低両集団ともM＝3.4で，ドイツ語力の高低にかかわらず国際児の平均値（高ドイツ語力：M＝9.1，低ドイツ語力：M＝8.9）よりはるかに低く，家庭内でドイツ語を使う量が基本的に少ないことがわかる。つまり外国人家庭ではドイツ語母語話者が家庭内におらず，ドイツ語資源が限定されがちな点を，ドイツ人の友人という家庭外の社会関係資本が補完する場合に，高ドイツ語力が形成されると推定される。親のドイツ語力をドイツ人友人数の「多い」「数人以下」の2集団間でt検定により比較したところ，父親では$t=-4.09$（$p<.001$），母親では$t=-2.67$（$p<.01$）と，ドイツ人友人数の多い生徒の親のドイツ語力は，数人以下の生徒の親より有意に高い。つまり親のドイツ語力の高さと，ドイツ語関連の社会関係資本の豊かさは関連する。しかし片親がドイツ生まれの国際家庭の場合，同様の比較をしても有意な差は見られなかった。

第2に国際家庭の場合にのみ見られた差として，次の2つが挙げられる。1つ目に，親の学歴については父親の場合のみドイツ語力別集団間で差があり，親のドイツ語力についてはM国生まれの母親の場合のみに差が見られた。ここでは親の就労や父母間の役割分担は明らかでないものの，一般に父親の学歴はその職業を通じて社会経済的地位につながり，母親は主な教育の担い手となりがちだとすると，母親のドイツ語力が子のドイツ語力の差に，より直接影響するというジェンダー差があるとも考えられる。2つ目に国際家庭の場合のみ，ロシア語とギリシア語では他2校より低ドイツ語力集団の生徒が有意に多いという言語集団間の差が見られた。各校の生徒と家庭の持つ諸条件の違いを反映している可能性もあるが，集団規模が小さく，結果の解釈には限界がある。

4.3.2　M語力別集団間の比較

次にM語力別集団間について比較分析した結果を検討する（表4）。以下でも，まず両家族類型で共通に見られた差，次に各家族類型別に見られた差の順に論じる。

まず両家族類型において高M語力集団で共通に値が高かった変数は，親子間のM語使用度とM語での読書時間であり，これが有効な投資活動と考えられる。つまり家庭でM語を多く使用することで会話力が育ち，読書を多くすることで読む力が育つと考えられる。

次に家族類型間で異なる結果として，外国人家庭にのみ確認されたのは次の2点である。まず第1にドイツ入国年齢が9歳以上である生徒が高M語力集団に有意に多いということである。第二言語への接触年齢が高いほど少数言語が保持されやすいことは以前から示されて

表 3　生徒の属性，資本，投資活動のドイツ語力別集団間の比較：家族類型別

	外国人家庭（N=113）			国際家庭（N=115）		
	ドイツ語力			ドイツ語力		
	高い（N=74）	低い（N=39）	χ^2	高い（N=90）	低い（N=25）	χ^2
性別　%（N）						
男子	60%（24）	40%（16）	0.83	79%（55）	21%（15）	0.01
女子	69%（50）	31%（23）		78%（35）	22%（10）	
入国年齢　%（N）						
9 歳未満	50%（5）	50%（5）	1.21	79%（89）	21%（24）	3.59
9 歳以上	67%（68）	33%（33）		0%（0）	100%（1）	
言語集団　%（N）						
ギリシア	67%（28）	33%（14）	0.36	68%（26）	32%（12）	9.40*
日本	57%（4）	43%（3）		87%（40）	13%（6）	
ポーランド	64%（21）	36%（12）		94%（15）	6%（1）	
ロシア	68%（21）	32%（10）		60%（9）	40%（6）	
ドイツ人友人数　%（N）						
多い	76%（47）	24%（15）	7.74*	81%（68）	19%（16）	1.13
数人以下	54%（27）	46%（23）		71%（20）	29%（8）	
	ドイツ語力			ドイツ語力		
	高い（N=74）	低い（N=39）		高い（N=90）	低い（N=25）	
	M（SD）	M（SD）	t 値	M（SD）	M（SD）	t 値
親の学歴（教育年数）						
父親	14.9（3.1）	13.4（3.1）	−2.41*	15.4（2.9）	13.8（3.1）	−2.21*
母親	15.0（2.9）	13.0（3.8）	−3.05**	15.5（2.5）	14.5（3.0）	−1.43
両親ドイツ語力（外国人家庭）／M 国生まれの親のドイツ語力（国際家庭）						
父親	12.2（2.6）	10.4（2.7）	−3.23**	12.6（2.7）	13.0（2.0）	0.45
母親	12.6（2.6）	10.0（3.3）	−4.29***	12.2（2.7）	10.6（2.4）	−2.18*
親子間のドイツ語使用度						
親子	3.4（4.2）	3.4（4.2）	0.01	9.1（3.2）	8.9（4.5）	−0.18
ドイツ語での読書と家庭学習（時間／週）						
読書	2.0（1.2）	1.5（1.3）	−2.32*	2.2（1.2）	1.5（1.2）	−2.65**
家庭学習	8.6（4.8）	7.5（4.9）	−1.13	8.5（4.1）	8.8（4.9）	0.26

*: p<.05，**: p<.01，***: p<.001

表4　生徒の属性，資本，投資活動のM語力別集団間の比較：家族類型別

	外国人家庭（N=140）			国際家庭（N=114）		
	M語力			M語力		
	高い（N=106）	低い（N=34）	χ^2	高い（N=56）	低い（N=58）	χ^2
性別　%（N）						
男子	77%（65）	23%（19）	0.32	49%（34）	51%（35）	0.00
女子	73%（41）	27%（15）		49%（22）	51%（23）	
入国年齢%（N）						
9歳未満	72%（84）	28%（32）	4.74*	48%（53）	52%（58）	2.15
9歳以上	95%（19）	5%（1）		100%（2）	0%（0）	
言語集団　%（N）						
ギリシア	69%（31）	31%（14）	1.69	61%（22）	39%（14）	11.08*
日本	78%（7）	22%（2）		32%（16）	68%（34）	
ポーランド	79%（41）	21%（21）		71%（10）	29%（4）	
ロシア	79%（27）	21%（7）		57%（8）	43%（6）	
	M語力			M語力		
	高い（N=106）	低い（N=34）		高い（N=56）	低い（N=58）	
	M（SD）	M（SD）	t値	M（SD）	M（SD）	t値
M国訪問	17.1（16.7）	12.7（8.4）	−1.82	19.6（13.6）	12.8（7.5）	−3.06**
親の学歴（教育年数）						
父親	14.7（3.0）	13.4（3.3）	−2.13*	15.0（3.0）	15.1（3.1）	0.15
母親	14.9（2.6）	12.6（4.5）	−2.67*	15.1（2.6）	15.6（2.6）	1.02
ドイツ生まれの親のM語力（国際家庭のみ）						
父親	—	—	—	8.0（4.2）	5.6（3.6）	−2.86**
母親	—	—	—	12.3（2.8）	9.6（3.7）	−2.20*
親子間のM語使用度						
親子	13.5（3.3）	9.8（5.1）	−3.89***	7.7（3.7）	5.8（2.7）	−3.13**
M語での読書と家庭学習（時間／週）						
読書	1.1（1.2）	0.4（0.8）	−3.82***	0.6（0.9）	0.4（0.5）	−2.03*
家庭学習	3.1（2.9）	2.4（1.6）	−1.34	2.5（2.0）	1.8（1.2）	−2.24*

*: p<.05，**: p<.01，***: p<.001

きたが（中島，2001等），それを裏付ける結果といえる。第2に，外国人家庭の場合，高M語力集団の両親の学歴は有意に高い。既に表3で見たように，高ドイツ語力生徒の親の学歴も有意に高かったことから，外国人家庭の親の学歴は子の2つの言語の力と関連する文化資本と考えられる。興味深いことに親の学歴はM語での読書時間と関連しており（父親学歴：+.31，p<.01，母親学歴：+.23，p<.01），またM語の読書時間はドイツ語の読書時間とも関連している（+.22，p<.01）。つまり外国児の場合，親の学歴が高いほどM語でもドイツ語でも読書をしていることになる。このような読書時間の2言語間の関連は国際児には見

られず，後述するように別の要因と関連していた。

他方で，国際家庭の場合にのみ差が見られた変数は4つあった。まず第1に，ドイツ生まれの親のM語力が高M語力の生徒では有意に高い。これはドイツ生まれの親にM語力があると親子間M語使用度が高まり，それが子のM語力を高めるためと考えられる[4]。第2に言語集団間の差が挙げられる。日本語学校においては高M語力の生徒が32%と，他の3校の57%～71%に比べて少ない。各集団の人数が少ないことから比較には一定の限界があるとしてもこの差は顕著であり，原因として，書字システムがドイツ語と大きく異なる日本語の特徴や，本国との地理的な距離など，ヨーロッパ言語を母語／継承語とする他の3校との違いが考えられる。第3に，M国訪問期間とM語での家庭学習時間の2変数の値が高M語力の生徒では有意に高い。ここで国際家庭の親子間のM語使用度の平均値に注目すると，高M語力集団ではM=7.7，低M語力集団ではM=5.8である。これに対し外国人家庭の高M語力集団ではM=13.5だが，低M語力集団でもM=9.8であり，国際家庭の高M語力生徒よりはるかに高い。つまり家庭内のM語使用が基本的に外国人家庭より少ない傾向のある国際家庭の場合，M国訪問によるM語の社会関係資本へのコミットやM語での読み書き活動を増やすという投資の量が差を生むと考えられる。実際，国際児ではM語の読書時間は，M語の家庭学習時間のみと関連しており（+.28, p<.01），読み書き習得活動の重要性が推定できる。

4.4 バイリテラシーへの影響要因

最後に，高バイリテラルになるか否かに影響する要因を特定する。ここでは二言語力とも高い高バイリテラルを1，それ以外のタイプ（図2参照）を0とするダミー変数を従属変数として，ロジスティック回帰分析（ステップワイズ，変数増加法）を家族類型別に行った。まず外国人児について独立変数に表3および表4で分析に使用した変数を用いたところ，表5の結果を得た。影響の大きさを表すオッズ比から，「母親のドイツ語力」，「親子間M語使用度」が正方向の影響をもつことがわかった。つまり高バイリテラルになるか否かは，子のドイツ語力に影響する母親のドイツ語力と，子のM語力に影響する親子間のM語使用に最も規定されると考えられる。

次に国際児については，既に見てきたように子の二言語力に与える影響は父母間で異なると思われるため，「父ドイツ生まれ母M国生まれの家庭」と「父M国生まれ母ドイツ生まれの家庭」を区別して分析することにした。しかし後者は少数であったため前者のみを分析対象として表6の結果を得た。オッズ比から「M語読書時間」と「M国訪問期間」が正方向の

表5 高バイリテラルに影響する要因（外国人家庭：N=88）

	回帰係数	オッズ比	p
母親ドイツ語力	.405	1.499	***
親子間M語使用度	.182	1.200	**
（定数）	−6.750	.001	***
−2 Log likelihood	95.782		
Nagelkere 決定係数	.327		
モデル適合度	p=.000		

: p<.01，*: p<.001

表6　高バイリテラルに影響する要因（父ドイツ生まれ母M国生まれ家庭：N=65）

	回帰係数	オッズ比	p
M国訪問期間	.054	1.055	*
M語読書時間	.733	2.081	*
（定数）	−1.935	.000	**
−2 Log likelihood	73.072		
Nagelkere決定係数	.240		
モデル適合度	p=.002		

*: p<.05, **: p<.01

影響を持つとわかる。この2変数は表4でみたように，国際児の場合M語力と関連していた要因である。つまり家庭内にドイツ語関連の資本が多い国際児の場合，ドイツ語力よりはM語力をいかに高めるかのほうが，高バイリテラルになるかどうかをより左右すると考えられる。

5. 結論

以上から得られた知見を総合すると次の2点に整理できる。

第1に，これまで移民背景の生徒の低学力の原因は，PISA等の大規模調査の結果から階層要因や家庭の少数言語使用に求められる傾向があった。しかし本稿の知見からは，高いドイツ語力はいずれの家族類型においても親子間のドイツ語使用ではなく，親の学歴やドイツ語力という文化資本と，読書という投資活動によって育つといえる。家庭ではむしろ少数言語関連の資本を失わないようにそれを使うこと，さらに少数言語でも読書という投資活動が高バイリテラシー形成に有効な条件である。

第2に，2つの家族類型間に見られた違いとしては次の2点が挙げられる。まず家庭内にドイツ語関連の資本が少ない傾向のある外国人家庭ではドイツ語使用も国際家庭よりはるかに少ない。しかしドイツ人友人数が多い場合，家庭外でドイツ語を用いる社会関係資本がこれを補完するため，高ドイツ語力が育つと考えられる。逆に，M語関連の資本が少なくなりがちな国際家庭では，特にドイツ生まれの片親のM語力が低い場合，M語力の形成が越えにくいハードルである。ゆえにM国訪問やM語の読書と家庭学習という投資が多い場合に高バイリテラルとなるといえる。つまり各家族類型で資本が乏しい傾向のある言語について，それを補完する投資が重要だといえる。

本稿は，バイリテラシーと家族の資本の関係について大まかな方向性を示すことはできた。しかし分析に用いたサンプルは小さく，ドイツの移民背景を持つ生徒全体より高学歴の親が多く，異なる言語集団を含む集団であった。また二言語力を実際に測定していないことや，小3から高校卒業学年までという年齢幅のある生徒が混じっており，二言語力が途中で変化する可能性を検討していない等の限界もある。

こうした限界を踏まえつつも，実践的示唆として次の2点を指摘したい。第1に高バイリテラルを育てるには，現地語力の低い生徒への現地語教育強化策にとどまらず，親の現地語力の向上と同時に，家庭での少数言語使用を奨励する親の啓蒙策が必要だということである。第2に，バイリテラシー形成に向けて二言語の読書活動に関する施策を今後検討すべきである。大規模調査では，低階層出身生徒でも読書量が多ければ階層間の学力格差はほぼ消失することが実証されており（OECD, 2002），移民背景をもつ生徒の場合も同様の効果が期待できる。

但し，本稿では外国人家庭と国際家庭の間に，読書時間に関連する諸条件の違いも見いだされたことから，今後この点も含めて，大規模調査による詳細な検証や，質的調査法による具体的な過程の解明が求められる。

付記

本稿はMHB2011研究大会における口頭発表を加筆・修正したものである。尚，本研究はDeutsches Jugendinstitut（ドイツ青少年研究所）の客員研究員助成プログラムの補助を受けた。また調査にご協力頂いた各補習校の皆様に感謝の意を表します。

注

(1) 少数言語は少なくとも幼少期には母語であっても，子どもの成長とともに現地語が強まり，少数言語の方は母語というより継承語と呼ぶほうがふさわしいことがあるため（中島2001），以下では「少数言語」と「母語／継承語」はシノニムとして使用する。

(2) 日本語の場合，対象は日本語補習授業校だが，後述のようにその生徒の大半が国際児であるため，ここでは母語／継承語学校の一つとして扱う。

(3) 多様な年齢で比較したところ，最も有意な差が見られた9歳未満，9歳以上を表示した。

(4) 滞在国生まれの親の少数言語力が家庭内の少数言語使用を促進することは既に実証されている（ビアルケ，2011）。

参考文献

Abada,T. et al. 2009 Pursuit of university education among the children of immigrants in Canada. Journal of Youth Studies, 12(2), pp. 285-207

Baker, C. 2006 Foundations of Bilingual Education and Bilingualism. Multilingual Matters.

ビアルケ（當山）千咲 2011 多言語環境家族における言語使用とその規定要因　MHB研究，7, pp. 87-105

BMBF 2006 Bildung in Deutschland, Berlin: BMBF

Bos, W. et al. (eds.) 2008 IGLU-E 2006, Münster: Waxmann.

Bourdieu, P. 1983 Forms of capital. In J. E. Richardson (ed.) Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education. New York: Greenwood Press

Clyne, M. & Kipp, S. 1997 Trends and changes in home language use and Shift in Australia 1986-1996." Journal of Multilingual and Multicultural Development, 18(6), pp. 443-473

Coleman, J. S. (1988) Social Capital in the Creation of Human Capital. The American Journal of Sociology, 94, pp. 95-120

Cresswell, J. 2004 Immigrant Status and Home Language Background. Camberwell: Australian Council for Educational Research.

DeHouwer, A. 2007 Parental language input patterns and children's bilingual use. Applied Psycholinguistics, 28(3), pp. 411-424

Deutsches PISA-Konsortium 2001 PISA 2000. Opladen: Leske+Budrich.

Esser, H. 2006 Migration, Sprache und Integration. Berlin: WZB

Haug, S. 2005 Zum Verlauf des Zweitspracherwerbs im Migrationskontext Zeitschrift für Erziehungswissenschaft, 8(2), pp. 263-284

宮島喬　2003　言語資本とマイノリティ　宮島喬・石井洋二郎（編）文化の権力　藤原書店　pp. 21-42

宮島喬・藤田英典（編）1991 文化と社会　有信堂

Müller, A. G. & Stanat, P. 2006 Schulischer Erfolg von Schülerinnen und Schülern mit Migrationshintergrund. In J. Baumert et al. (Eds.) Herkunftsbedingte Disparitäten im Bildungswesen. Wiesbaden: VS Verlag, pp. 221-255.

Mullis, I. V. S. et al. 2007 PIRLS 2006 International Report, International Association for the Evaluation of Educational Achievement (IEA)

中島和子　2001　バイリンガル教育の方法（増補改訂版）アルク

Nauck, B. et al. 1998 Intergenerationale Transmission von kulturellem Kapital unter Migrationsbedingungen. Zeitschrift für Pädagogik, 44, Weinheim: Beltz, pp. 701-722

OECD 2002 Reading for Change. Paris: OECD

OECD 2006 Where Immigrant Students Succeed. Paris: OECD

PISA-Konsortium Deutschland (hrsg.) PISA 2003, Münster: Waxmann,

Portes, A. & Rumbaut, R. 2001 Legacies. University of California Press

Portes, A. & Hao, L. 1998 E Pluribus Unum: Bilingualism and Loss of Language in the Second Generation. Sociology of Education, 71, pp. 269-294

Ramm, G. et al. 2005 Soziokulturelle Herkunft und Migration im Ländervergleich. In PISA-Konsortium (ed.), PISA 2003, Münster: Waxmann, pp. 269-298

佐藤郡衛・片岡裕子（編）2008 アメリカで育つ日本の子どもたち　明石書店

関口知子　2007　移動する家族と異文化間に育つ子どもたち　南山短期大学紀要，35, pp. 205-232

von Gostomski, C. 2007 RAM 2006/2007 Nürnberg: BAMF

Capital of Families with an Immigrant Background and Child Biliteracy
A Comparative Analysis on Foreign- and Intermarriage Families in Germany

Chisaki TOYAMA-Bialke
Otsuma Women's University, Part-time Lecturer

The purpose of this study is to examine how biliteracy of students with an immigrant background (i.e. foreign-born students or students with at least one foreign-born parent) is determined by their social- and cultural capital. Using data from student questionnaires who are enrolled in four community-based heritage language schools (Greek, Japanese, Polish, and Russian) in a German city, a comparative analysis was undertaken between two different family types: foreign families (both parents are born in the respective countries of origin) and intermarriage families (one parent is born in Germany). The findings can be summarized as the two following points: 1) A common point for both family types is that parents' rich cultural capital (high education level and proficiency of the majority language) as well as students' reading activities are associated with their proficiency in the majority language. On the other hand, the use of the minority language in the family and reading activities in that language contributes to its high proficiency most. 2) The successful way to achieve students' high biliteracy is to invest into weaker capital in the respective family types.

Keywords: biliteracy, social capital, cultural capital, foreign family, intermarriage family